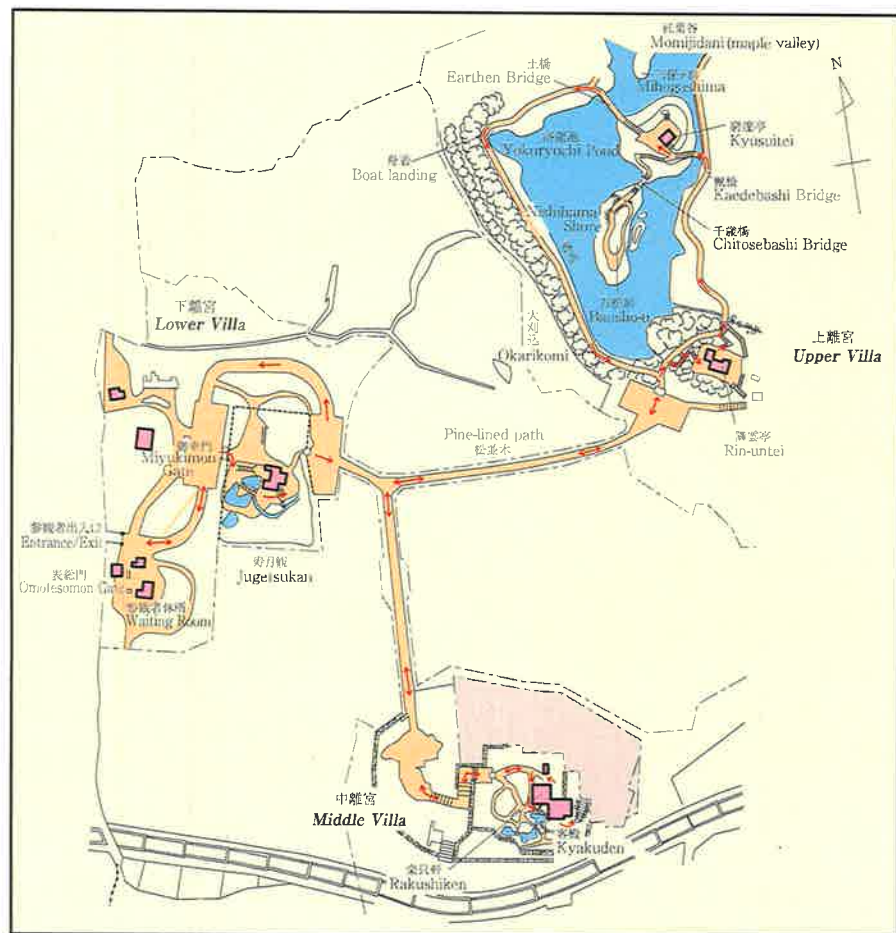


■修学院離宮 略図



このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



発行 公益財団法人菊葉文化協会
写真・資料提供 宮内庁

修学院離宮

Shugakuin Imperial Villa



修学院離宮の歴史

修学院の名は、10世紀後半この地に修学院という寺が建立されたのが始まりであった。南北朝時代以後この寺は廃絶したが、地名は修学院村として残った。修学院離宮は、桂離宮に比べること30余年、明暦元年から2年（西暦1655～1656年）にかけて後水尾上皇によって造営工事が起こされ、万治2年（1659年）頃に完成した山荘である。離宮の造営より早く上皇の第一皇女梅宮が得度して、現在の中離宮付近に草庵を結び、円照寺を創建されていたが、早くから別荘としての適地を探しておられた上皇は円照寺を大和の八幡に移し、上と下の二つからなる離宮を建設した。幕府との間に緊張が続いた時代であっただけに、短期間にこれほど大規模な山荘を造営し得たことは一つの奇蹟でもある。また、上皇の第八皇女元子内親王（茶宮）のために建てられた山荘に東福門院（後水尾上皇の皇后、将軍徳川義道の娘和子）亡き後の女院御所の建物を一部移築して拡張したが、上皇崩御の後、元子内親王は落飾得度してこれを林正寺となされた。明治18年（1885年）林正寺から境内の半分が宮内省に返還され中離宮と呼ばれるようになった。昭和39年（1964年）上・中・下の各離宮の間に

展開する8万㎡に及ぶ水田地を買って付属農地とし、景観保持の備えにも万全を期して今日に至っている。

概要

比叡山の麓、東山連峰の山麓に造られた修学院離宮は、上・中・下の三つの離宮からなり、上離宮背後の山、借景となる山林、それに三つの離宮を結ぶ松並木の道と両側に広がる田畑とで構成されている。総面積54万㎡を超える雄大な離宮である。明治期に宮内省の所管となるまでは離宮を囲む垣根も全周にはなく、自然に対して開放された山荘であった。

下離宮には、創建時では最大の建物の背曲園があったが、比較的早い時期に失われ、今は南を庭園に囲まれた方月観が残っている。中離宮には、築具軒と茶殿があり、南に庭がある。上離宮は、修学院離宮の創建時からあり、谷川をせき止めた浴池と呼ぶ大きな池を中心とした回遊式庭園となっている。その浴池を一望におさめる東南の高みには舞臺草、中島に菖蒲等がある。山麓に広がる離宮のため上と下の離宮の標高差は40m近くあり、大小の滝に加え水成の早い小川もあり、どこにいても絶えず水の音を聴くことができる。昔は峠道にすぎなかった松並木から眺める風景もまたすばらしい。

京都御所、京都大宮御所、京都仙洞御所、桂離宮とともに皇室用財産（国営財産）として宮内省が管理している。

このパンフレットは、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。





■下離宮

■寿月観

楹柱の屋根と花菱紋の透かし彫りが施してある板戸の御幸門（上段写真）から下離宮に入る。さらに中門を潜ると眼前に庭園がひらけてくる。左手の緩やかな石段の上には寿月観の玄関「御興客」が見える。扁形灯笼、朝鮮灯笼等を配した死路を上ると寿月観（下段写真）の前に出る。創建当時の建物ではないが、文政年間に出現のとおり再興されたもので、一の間に掛かる「寿月観」の扁額には後水尾上皇の宸筆である。下離宮は、上離宮への拠点でもあり、今はない野山園とともに相当のもてなしのできる設備が備わっていたと思われる。建物は柱立入母屋敷寄屋風造りとなっている。



一の間は十五畳で、三畳の上段を設け、二畳半の床と起程床、節題がある。その棚の戸袋には鶴の絵、下の地袋には岩と樹の絵が描かれ、筆者はともに旅花中である。また、襖四枚には唐漢三突の絵が屏風により描かれている。ここには後水尾上皇のお好みの菱形模様が多く用いられている。

二の間の正面に杉戸があるが、光格上皇のお好みの物で仙洞御所から移したと伝えられている。絵は夕顔の絵で筆者は不詳である。杉戸の内側は水屋になっている。

三の間はお供の控えの間で機懸は前母で、筆者は岡本景澄である。南表に後水尾上皇の宸筆による蔵六庵の扁額が掛かっているが、蔵六庵は別棟にあった建物で今はすでにない。三の間の奥は五畳の間であり、ここの時鐘窓から視く外景は四季を通じて美しい。

御幸門と相対する位置にある東門から出ると畧界が大きく開け、山頂の向うに比叡山から東山、北山の山並みが一望される。

■中離宮

■楽只軒

楽只軒は、光子上内親王のための建物であり、その後、内親王の山荘は拡張整備されて林丘寺となった。かなり古い建物で、現在の林丘寺にある扁額の年紀銘から推察すると寛文8年（1668年）かその前年に創建されたものと思われる。南側には庭に面して広縁を設け、床を低くとり庭との一体感を深めている。特別な技巧は凝らしていないが、簡素な中にも趣があり、いかにも内親王の御殿らしい。

手前六畳は一の間で吉野山の桜が描かれ、奥の間は二の間に嵐山川の紅葉が描かれている。筆者はともに狩野探信（探庵の子）である。



■客殿



楽只軒の東南の高みに工夫のある階段でつながれた客殿がある。延宝6年（1678年）東福門院が亡くなられた後、天和2年（1682年）光子上内親王のために女院御所の奥対面所から移築したものである。入母屋造り木葺葺の扉の深い屋根を持ち、板戸を建て、襖縁を削って、その一部に、漁村で網を下した形を表した「網下の欄干」と呼ばれる低い手すりを付けている。

一の間は十二畳半で、二畳半の飾り欄を構えるが、互い違いに配された大小五枚の欄板がいかにも籠がたなびいているように見えることから籠欄と呼ばれ、桂離宮の桂欄、三宮院の榴欄とともに天下の三欄と称されている。戸袋には更紗模様の地袋には友禅染、引手は羽子板の形、花車を形どった七宝流しの釘隠など、女性のお住まいらしい華やかさが現れている。床、襖、障には和歌や漢詩の色紙を張り交せるなど雅を極めていく。加えて、随所に見られる飾り金具には葵の紋が配されており、徳川家から嫁いだ東福門院の背後にひかえる幕府の権勢が窺われているようにも見える。



また、楓風堂の錦の絵を描いた杉戸の筆者は不詳であるが、鯉の絵の網だけは内山忠琴の筆と伝えられている。

■上離宮

■大刈込

上離宮に上る松並木の道（御馬車道）から左手前方に大刈込が見える。谷川をせき止めて浴龍池を作った土堤は石垣で四段に土留めをし、石垣上部の斜面を数十種類の常緑樹を混植した生垣で覆っているものである。石垣の目隠しとなる高生垣とともに周囲の自然とよく調和している。



■騎雲亭

上離宮の御馬門を入ると高い刈込の間にあって急な石段を上る。内製の刈込みで畧界をささげられ、石段がカーブしているの上りつめたところは何が待ちうけているのか見当もつかない趣向が奇抜である。頂上に騎雲亭がある。ふり向けは眼下に浴龍池が展開し、洛北の山々が見渡せる。ずっと左手に洛中の街並みがひろがり、その向こうに西山の峰々が望まれる。天の眺望ここに極まった感じであり、後水尾上皇の御心遣いを見る思いである。騎雲亭は文政年間の再建になるものであるが、浴龍池に面しては六畳の一間と三畳の二間の間があり、床も欄もなく一切の装飾を削いで自然に立ち向かうのみである。北には谷川に臨んで板の間があり、洗心亭という。三方を開け放せば、吹き抜ける風も、木立の奥に6m余りを流れ落ちる龍滝の水音も全くほしいままである。深い軒下のたたくは、襖に小石を一つ、二つ、三つと埋め込み、「三石」などと呼ばれている。

長さが一間余りの欄干付き木橋の風輪を渡ると中島の頂上に宝形造りの建物、騎雲亭がある。文政年間に修復はあったものの創建当時の建物で現存する唯一のものである。「騎雲」の扁額は後水尾上皇の宸筆である。十八畳と附属の水屋の二間からなり、一隅に直角に折れて登一敷高した上段を設け、上段の御いっばいに低く一枚板を渡して御時寄としている。

■騎雲亭

長さが一間余りの欄干付き木橋の風輪を渡ると中島の頂上に宝形造りの建物、騎雲亭がある。文政年間に修復はあったものの創建当時の建物で現存する唯一のものである。「騎雲」の扁額は後水尾上皇の宸筆である。十八畳と附属の水屋の二間からなり、一隅に直角に折れて登一敷高した上段を設け、上段の御いっばいに低く一枚板を渡して御時寄としている。



■浴龍池

鳥の形を泳ぐ龍の姿に見立てたものと言われている。池を巡って苑路があり、干流橋と呼ばれる石橋が、騎雲亭のある中島と浴龍池の中島（方松島）をつないで架けられている。切り石を組んだ橋脚に一枚石を渡し、二つの橋脚に宝形造りと寄棟造りの四脚風なものを建ててこれをつないでいる。いかにも中国的な感じで自然に溶け込まず違和感があるが、それもまたアンバランスの美といえる。紅葉谷や緑が鳥の物静かな景観と大刈込の上に位置する浜辺の両浜は明るくのびのびとした風景であり、対照的に展開する。浴龍池は御遊遊の場であり、鳥々を廻りながら管弦や詩歌の会などが行われた。



■機懸

■西浜

